

なみえ

ポリス

通信

たゆまぬ努力で安全安心

署舎 双葉分庁舎 浪江

震災乗り越え 地域の支えに



さすまたを使って犯人逮捕の訓練をする浪江分庁舎の署員

東日本大震災、そして東京電力福島第1原発事故から13年…。私たちジャーナリストスクール4今の仕事内容などを取材

した。そこにはつらい震災を乗り越え、強い意志で地域の「安全安心」を守り抜こうと尽力する姿があった。

ヒラメなどの漁業基地として有名な請戸港がある浪江町。大震災では津波での人的被害が大きかった。衝撃を受けたのは震災対応で、双葉署では署員3人が殉職・行方不明となったという。津波に巻き込まれた1人はいまだに発見されていないという。非番だった浪江分庁舎の警察官も津波から逃げる住民誘導に奔走し、帰らぬ人となった。その後起こった原発事故。地域住民だけでなく警察官も混乱を極めた。震災時、浪江分庁舎で捜査を担当していた小路輝さん(現福島県警本部勤務)は「とにかく私たちが何をしていたか分からないほどだった」と振り返る。刑事だった小

路さんも当初、津波から逃げる避難者の誘導に当たったが、原発事故後の対応は特に厳しいものだったと語る。国の避難指示により、浪江分庁舎で活動する警察官も拠点を移すことになった。署員約30人が避難区域外の同分庁舎津島駐在所に移動した。狭い駐在所は署員であふれかえった。住民がいなくなった町では窃盗が多発した。小路さんらには対応に追われた。犯人を捕まえるために関東など他県に



鑑識捜査の体験をする私たち

まで足を運んだこともあったという。「私たち警察官も自然災害に対する意識が強ければ、もっと多くの人を救えたかもしれない」。小路さんは13年以上たった今も自問自答している。「さすまた」を使った訓練の様子や鑑識捜査など警察官の日常を見た。署員たちは皆真剣で、いざという時に備えている。鋭いまなざしの向こうには人命を守る、治安を維持するという決意がみなぎる。

私たちが災害、犯罪などの事件と常に背中合わせなのかもしれない。私たちの「安全安心」はこういった方々のたゆまぬ努力、犠牲の上にあるのだ。警察官とはただの公務員だと思っただけ。しかし取材を通して尊敬、感謝、ただ、ただ「リスベクト」しかなかった▼想定外の大震災。警察官も混乱を極めた。そんな中、危険を顧みず現場に行った。人命を優先して行動し殉職した警察官がいた。涙が止まらなかった。▼福島県に縁もゆかりもない人が、故郷に帰れない福島県民のために力になりたい。県外の警察から福島県警に志願し「ウルトラ警察隊」として活躍している▼見返りを求めずに誰かのために奉仕する。「恩送り」。私も誰かに：そんな思いになった。震災を知らない私たち若い世代が震災を学び、自分たちの目線で伝えることが復興の後押しになる。(伊東聡太)



皇宮警察から福島県警に出向する皇宮警察から

警ら徹底し犯罪抑止

ウルトラ警察隊 工藤丈昂さん(29)

浪江分庁舎には東日本大震災、東京電力福島第1原発事故の被災地支援として、全国警察から福島県警に特別出向した警察官「ウルトラ警察隊」の拠点があつた。隊員の一人、工藤丈昂(ひろたか)さん(29)は天皇陛下らをお守りする皇宮警察から今年4月、福島県警に配属された。皇宮警察では馬に乗って国賓を守る騎馬護衛なども担っていた。「いまだに人が住むことができない地域がある。古里に帰りたい。でも帰れない人がいるんだ」。同じ皇宮警察から福島県警に出向した先輩の話を聞いた。「被災地のために何かしたい」。心のどこかで何かを探していた。「よし、俺も被災地のために頑張ってみよう」。復興のつち音が聞こえ、徐々に避難者も戻りつつある浪江町。「いつもありがとう。パトロールをしてくれると離れていても安心するよ」。一時帰宅した避難者から声をかけられたという。「犯罪などによって復興の歩みをとまらないうちに地域を支えたい」と思いを新たにす。

「犯罪者を捕まえることも大切だが、警ら活動を徹底し、犯罪が起らないよう、抑止に努めたい。福島県を第2の古里だと思っただけ力が全力で復興を支えたい」と力を込める。ウルトラマンのように優しく、力強く被災地を見守っている。私たちが協力して製作しました



- 八木沼帆菜(平三小5年) 比留川凧(平二小6年) 内藤愛美(平五小6年) 斎藤祈、安斉晁汰(岳陽中1年) 伊藤唯(石川義塾中2年) 伊東聡太(相馬高3年)

編集後記

警察官とはただの公務員だと思っただけ。しかし取材を通して尊敬、感謝、ただ、ただ「リスベクト」しかなかった▼想定外の大震災。警察官も混乱を極めた。そんな中、危険を顧みず現場に行った。人命を優先して行動し殉職した警察官がいた。涙が止まらなかった。▼福島県に縁もゆかりもない人が、故郷に帰れない福島県民のために力になりたい。県外の警察から福島県警に志願し「ウルトラ警察隊」として活躍している▼見返りを求めずに誰かのために奉仕する。「恩送り」。私も誰かに：そんな思いになった。震災を知らない私たち若い世代が震災を学び、自分たちの目線で伝えることが復興の後押しになる。(伊東聡太)